01. 文化財保存活用地域計画とは？

資料１

文化財保存活用地域計画は、文化財保護法に位置付けられた市町村における文化財の保存と活用に関する総合的な法定計画であり、市町村の総合計画の下に体系づけられるものです。地域の歴史や文化にまつわるコンテクストに沿って多様な文化財を俯瞰し、総合的・一体的に保存・活用することにより、地域の特徴をいかした地域振興に資するとともに、確実な文化財の継承につなげるものです。文化財保護行政の中・長期的な基本方針を定めるマスタープランと、短期的に実施する具体的な事業を記載するアクションプランとしての両方の役割を担います。

この計画を作成・実施することにより、住民・民間団体・文化財部局・庁内関係部局などが地域総がかりで文化財を守り、いかし、伝える体制の構築を図り、文化財の存続につなげていくことが期待されています。

いままでは…

指定・登録等に係る文化財を
個別に保存・活用

古民家　遺跡　舞踊
仏像　神社仏閣　お祭り

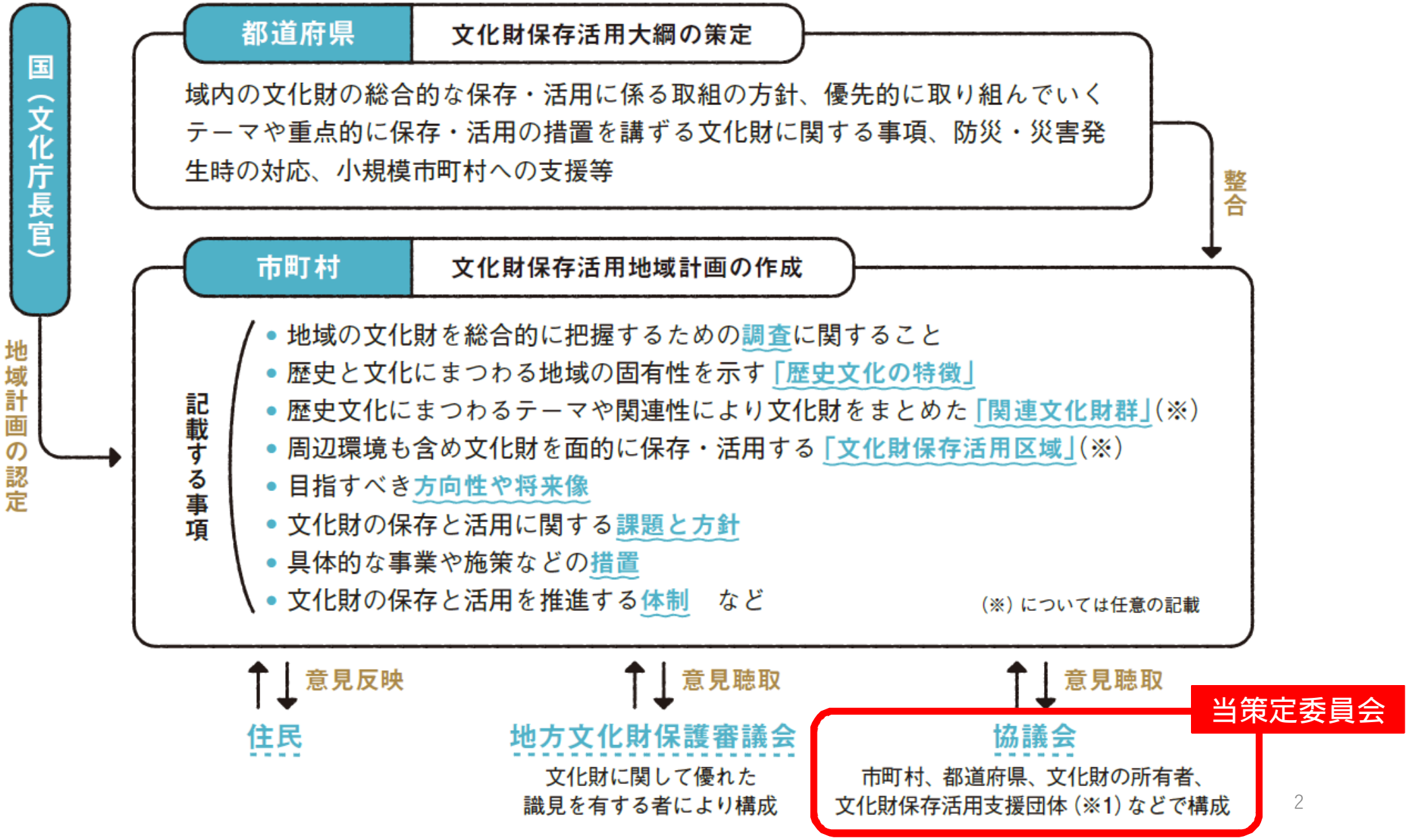
これに加えて、
地域社会全体で
文化財を継承

地域計画を作成すると…

未指定文化財も含めた地域の文化財の
総合的・一体的な保存・活用

古民家　遺跡　舞踊
仏像　神社仏閣　お祭り




国（文化庁長官）
地域計画の認定
都道府県
文化財保存活用大綱の策定
域内の文化財の総合的な保存・活用に係る取組の方針、優先的に取り組んでいくテーマや重点的に保存・活用の措置を講ずる文化財に関する事項、防災・災害発生時の対応、小規模市町村への支援等
整合
市町村
文化財保存活用地域計画の作成
記載する事項
地域の文化財を総合的に把握するための調査に関すること
歴史と文化にまつわる地域の固有性を示す「歴史文化の特徴」
歴史文化にまつわるテーマや関連性により文化財をまとめた「関連文化財群」（※）
周辺環境も含め文化財を面的に保存・活用する「文化財保存活用区域」（※）
目指すべき方向性や将来像
文化財の保存と活用に関する課題と方針
具体的な事業や施策などの措置
文化財の保存と活用を推進する体制　など
（※）については任意の記載
意見反映
住民
意見聴取
地方文化財保護審議会
文化財に関して優れた識見を有する者により構成
意見聴取
当策定委員会
協議会
市町村、都道府県、文化財の所有者、文化財保存活用支援団体（※1）などで構成

認定市町村が感じた地域計画作成のメリット

パンフレットより転用

①文化財保護におけるビジョンの共有	⑤住民、関係団体、庁内各課、他地域などとの連携強化
②中・長期的な方針や具体的な事業の可視化による計画的な行政運営	⑥作成に伴う調査での文化財及び類型を超えた文化的所産の把握
③文化財保護行政への他部局・上層部の理解促進	⑦関連文化財群の設定による地域住民の文化財への興味喚起と交流活性化
④地域計画作成時の連携体制が事業計画の推進に寄与	⑧補助率加算などの国庫補助事業における優遇

地域計画認定市町村へのアンケート（2020年10月）より

03. 認定の基準

文化庁長官による認定には次に掲げる要件を満たしていることが必要です。

1. 文化財保存活用地域計画の実施が当該市町村の区域における文化財の保存及び活用に寄与するものであると認められること
2. 円滑かつ確実に実施されると見込まれるものであること
3. 文化財保存活用大綱が定められているときには、当該大綱に照らし適切なものであること

認定を受けた場合の特例措置

- **国の文化財登録原簿への登録の提案**
  ボトムアップでの未指定文化財の保護の推進
- **町村への一部事務の権限移譲**
  認定町村における円滑な計画の実施

今金町の概要

面　積	568 ㎢ ※東京23区 628㎢
人　口 世帯数	5,037人 2,487世帯 ※2021年2月末時点
高齢化率	40.7% ※2019年
学校数	小学校 2校 中学校 1校 道立特別支援学校 1校
基幹産業	農業 ジャガイモ、米、ミニトマト、長ネギ、酪農（乳牛、肉牛）等
農家数	283戸 ※2015年

資料２



特産品 ジャガイモ「今金男しゃく」

●昭和28年(1953年)

作付け品種を男爵に一本化

●昭和30年(1955年)

ブランド「今金男しゃく」を確立、品質管理を徹底

「幻の馬鈴薯」、「ジャガイモの最高級品」と評され、プライスリーダーとして市場をリード

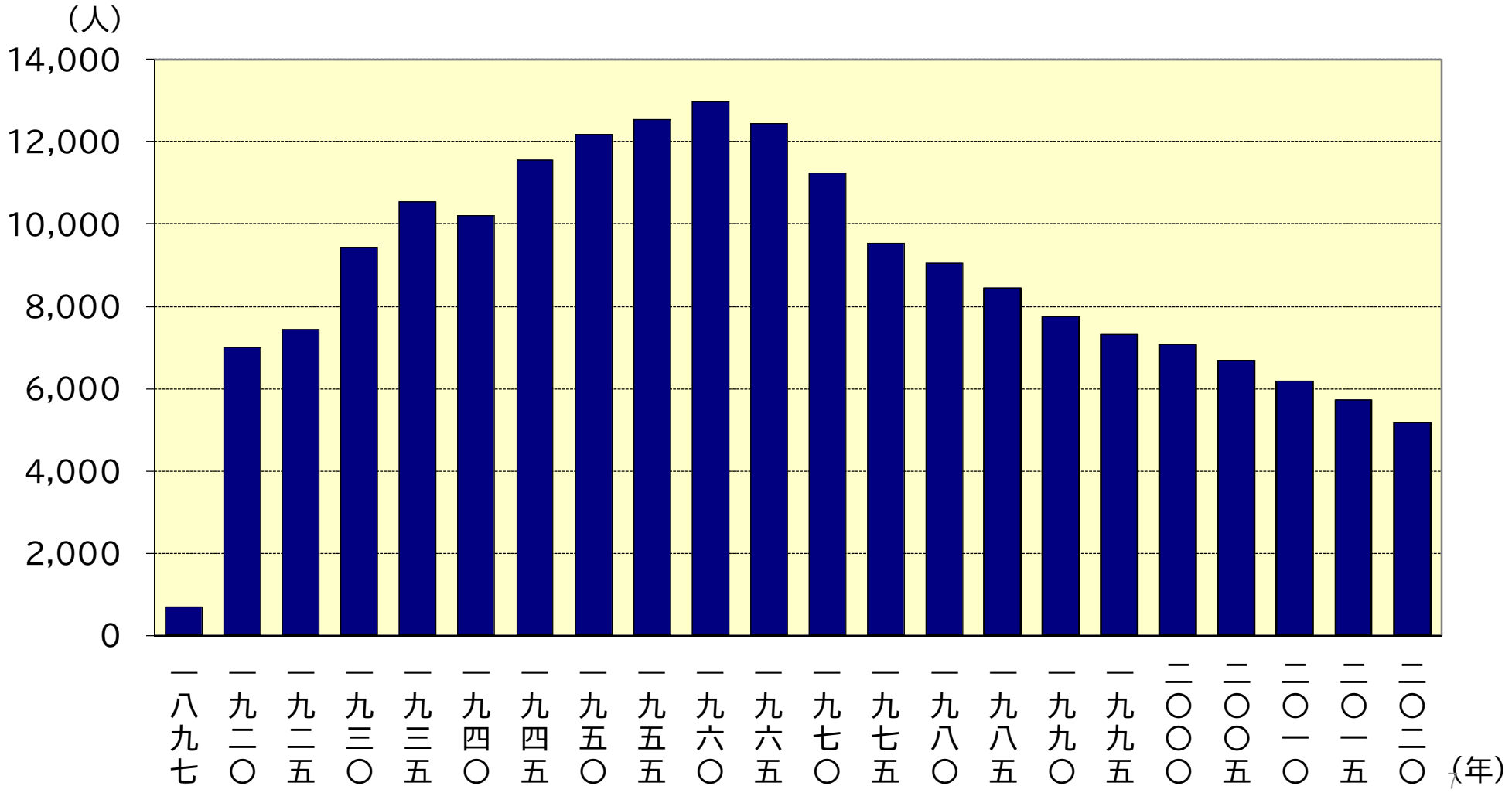
●令和元年(2019年)

地理的表示(GI)保護制度に登録される

「地域には、伝統的な生産方法や気候・風土・土壌などの生産地等の特性が品質等の特性に結びついている産品が多く存在する。これらの産品についてその名称(地理的表示)を知的財産として登録し、保護する制度」(農林水産省HPより)



今金町の人口の推移


（人）
14,000
12,000
10,000
8,000
6,000
4,000
2,000
0
一八九七
一九二〇
一九二五
一九三〇
一九三五
一九四〇
一九四五
一九五〇
一九五五
一九六〇
一九六五
一九七〇
一九七五
一九八〇
一九八五
一九九〇
一九九五
二〇〇〇
二〇〇五
二〇一〇
二〇一五
二〇二〇
（年）

町の沿革 （鉱業・農業を視点として）

江戸時代初め	上流域	利別川段丘面上での大規模な砂金採掘、カニカン岳中腹での金山経営。
幕末	上流域	箱館奉行所が砂金採取を行う。／松浦武四郎が利別川を調査。メノウやマンガンの有用性を指摘する（『丁巳報登宇志辺津日誌』）。
1880（M13）年	上流域	大島勘左衛門らがメノウ、マンガンの採掘事業を開始する（M19まで）。
1891（M24）年	中流域	志方之善らがキリスト教理想郷建設を目的に入植（開拓の嚆矢）。
1893（M26）年	中流域	今村藤次郎らが今金地区に入植。その後、各地区に続々と入植。
1894（M27）年	上流域	福田重平がマンガン採掘事業を開始。以降、明治40年代が最盛期。
明治40年代	上流域	メノウ採掘の最盛期。加工のため若狭へ移出。全国産出額の約97%を占める。
1897（M30）年		自治制を施行し「利別村」となる。それまでは瀬棚村の一部。
1922（T11）年	中流域	農業用水路が開通し、平野部での水田開発に弾みがつく。
1932（S7）年		国鉄瀬棚線全線開通（長万部～国縫～瀬棚）し、物流が大きく発展。
1947（S22）年		町政を施行し「今金町」となる。今村藤次郎・金森石郎の冠字が由来。
1953（S28）年	中流域	今金町農協が馬鈴薯の作付け品種を男爵に一本化し、特産品化へ注力。
1966（S41）年	上流域	ゼオライト（緑色凝灰岩）の採掘事業が始まる。以降、継続。
1967（S42）年	上流域	マンガン鉱山がすべて閉山。

町の沿革 （鉱業・農業を視点として）

江戸時代初め	上流域	利別川段丘面上での大規模な砂金採掘、カニカン岳中腹での金山経営。
幕末	上流域	箱館奉行所が砂金採取を行う。／松浦武四郎が利別川を調査。メノウやマンガンの有用性を指摘する(『丁巳報登宇志辺津日誌』)。
1880(M13)年	上流域	大島勘左衛門らがメノウ、マンガンの採掘事業を開始する(M19まで)。
1891(M24)年	中流域	志方之善らがキリスト教理想郷建設を目的に入植(開拓の嚆矢)。
1893(M26)年	中流域	今村藤次郎らが今金地区に入植。その後、各地区に続々と入植。
1894(M27)年	上流域	福田重平がマンガン採掘事業を開始。以降、明治40年代が最盛期。
明治40年代	上流域	メノウ採掘の最盛期。加工のため若狭へ移出。全国産出額の約97%を占める。
1897(M30)年		自治制を施行し「利別村」となる。それまでは瀬棚村の一部。
1922(T11)年	中流域	農業用水路が開通し、平野部での水田開発に弾みがつく。
1932(S7)年		国鉄瀬棚線全線開通(長万部～国縫～瀬棚)し、物流が大きく発展。
1947(S22)年		町政を施行し「今金町」となる。今村藤次郎、金[illegible]が由来。
1953(S28)年	中流域	今金町農協が馬鈴薯の作付品種を男爵に一本化し、特産品化へ注力。
1966(S41)年	上流域	ゼオライト(緑色凝灰岩)の採掘事業が始まる。以降、継続。
1967(S42)年	上流域	マンガン鉱山がすべて閉山。

上流域での鉱業

中流域での農業

今金町の文化財

国指定文化財

文化財の種別		名称・点数	所在地	指定日・概要	
有形文化財	重要文化財	ピリカ遺跡出土品 163点	美利河	1991年6月21日。1983・84年の調査で得られた計約11万点の旧石器時代の石器のうち、学術的価値の高い163点が指定。重要文化財展示室にて実物を展示中。	
記念物	史跡	ピリカ遺跡	美利河	1994年4月26日。指定区域は99,090平方m。史跡名は地名の由来であるアイヌ語を尊重し、また普及を図るためカタカナ表記の「ピリカ遺跡」とする。	
無形文化財	重要無形文化財	松前神楽	今金	2018年3月8日。北海道南部で神職が中心に伝承する江戸時代の神楽で、松前神楽北海道連合保存会が伝承するもの。今金八幡宮例大祭等で演じられている。	

今金町の文化財

町指定文化財

文化財の種別		名称・点数	所在地	指定日・概要	
有形文化財	重要文化財	ピリカ遺跡出土品 約11万点	美利河	1991年5月9日。国指定重要文化財を除く約11万点の石器類。	
記念物	天然記念物	ピリカカイギュウ 骨化石33点	美利河	1994年12月14日。海生草食哺乳類の化石で、現生種で最も近い種はジュゴン。化石資料は保管庫2階で保管し、実物大の骨格復元模型は1階で展示中。	
民俗文化財	有形民俗 文化財	上田式豆まき器	美利河	2015年2月17日。1909（明治42）年、上田甚作氏が考案した豆まき器で、その利便性の高さから、今金町発祥の農機具が半世紀にわたり全道各地に普及し、北海道の畑作農業に大きく貢献した。	

今金町の文化財

その他選定物件

指定者		名称	所在地	所有者 管理者	
国 選定	日本美しの森 ～お薦め国有林～	美利河・二股自然休養林	美利河	林野庁	
北海道 選定	北海道の巨樹・ 名木 150選	（とこよのまつ） 常代の松	種川	国土交通省	

今金町の文化財

未指定文化財（指定候補物件）

文化財の種別		名称・点数	所在地	概要	
記念物	史跡	美利河砂金採掘跡	美利河	江戸時代前期に稼働した「クンヌイ砂金山」関連遺構が良好に残され、当時の芝金採掘技術を示す貴重な遺構である。	
有形文化財	美術工芸品	美利河マンガン鉱山関連資料（鉱業用具・史料）約50点	美利河	明治20年代から昭和40年代初めまで稼働したマンガン鉱山で使用されていた動力機械、鉱山事務所にあった用具・日誌など、当時の鉱山経営を知るうえで貴重な資料である。	
有形文化財	美術工芸品	カニカン岳金山跡鉱山臼3点	美利河	江戸時代初頭の稼働と考えられているカニカン岳金山跡から回収された鉱山臼は、当時の金山経営を物語る貴重な資料群であり、北海道の鉱山史を知る上でも極めて貴重。	
記念物	天然記念物	美利河温泉鍾乳洞	美利河	奥美利河温泉の温泉水によって形成された鍾乳洞（温水カルスト）で、日本で初めて確認されたとされる。	

今金町の文化財･自然保護に関わる民間団体

団体名	活動内容
ピリカ遺跡ボランティアの会	花植えや除草、イベント運営、体験指導、展示解説、記念品販売等を通じて、史跡ピリカ遺跡の保護と啓発を図る。
今金町歴史をたどる会	郷土史の調査研究、史資料の収集を行い、成果の普及啓発を図る。「いまかね学検定公式問題集」の編集・発行。
NPO清流保護の会	清流日本一の後志利別川を守るため、清掃活動を通じて河川環境を保全する。
大型紙芝居じゃがいもの花	今金町の郷土史、アイヌ文化、昔話などを大型紙芝居として制作し、文化祭や学校等の場面で公演し、普及啓発を図る。
いまかね絵本普及委員会	町特産品の野菜や化石などをキャラクターに物語を創作し、町独自の絵本を制作。読み聞かせを通じて、地域の魅力を知らせる活動をしている。
ピリカプロジェクト委員会	美利河地区にある資源を活用し、健康づくりや歴史学習、観光活用の観点から地域活性化につなげようとする活動団体。札幌国際大学との連携事業。
今金公園再生プロジェクト	開拓創始家・今村邸とその周囲の今村公園を再整備し、町民の憩いと交流の場、地域の子どもたちの居場所づくりを提供する活動団体。

第6次今金町総合計画　（2021～2030）

資料３

第２章　今金町の将来像

本町は、日本を代表する清流である後志利別川と緑豊かな平野と丘陵が広がり、豊かな自然環境とともに先史時代の遺跡をはじめとして先祖から受け継がれてきた歴史や文化があります。

これらの自然や歴史を守り、資源を未来に引き継いで行くためには、自分たちの力で自らのまちをつくるという自立意識を、常に町民と行政が共有し、広い視野でまちづくりを進める必要があります。（以下略）

《10 年後の町の将来像》

みんなで創る　未来を拓く物語

～人と人の想いで紡ぐ、やさしさあふれる町～

第6次今金町総合計画　（2021～2030）

まちづくりの基本方向

◆まちの特性を活かした魅力あふれるまちづくり

人それぞれに個性があるように、“まち”にもその地域の気候風土や歴史に根ざした固有の特性があります。今後も、農業の町としての知名度を高め、特性を磨き、町の個性を確立するまちづくりに取り組みます。

◆新しい時代の流れを取り入れたまちづくり

ＩｏＴ※15などの新しい技術の活用や持続可能な国際社会を目指すSDGs※16など、新しい時代の流れを今金町に合った形で取り入れたまちづくりを進めます。

◆町民とともに創るまちづくり

「まちづくりの主人公は町民である」ことを念頭に、町政に関する情報発信を積極的に進めるとともに、町民の意向や意見の把握に努め、町民とともに歩むまちづくりを進めます。

第6次今金町総合計画　（2021～2030）

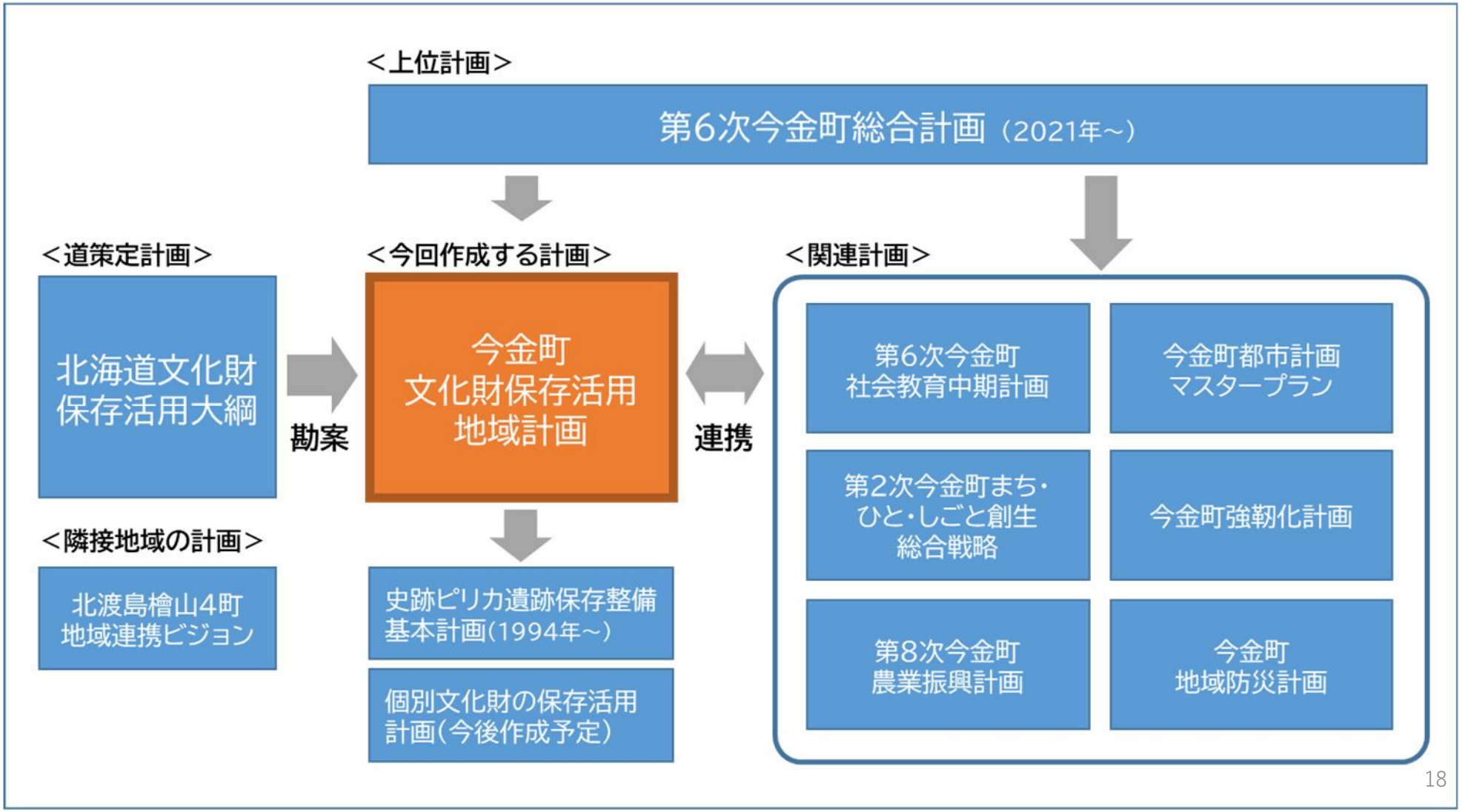
基本目標１ いきいき今金「人づくり」

5 文化振興

町民が文化に親しみ文化活動に参加できる環境づくりや文化･芸術の担い手を育成するとともに、本町や我が国にとってかけがえのない文化財を保護し、基礎的な調査・研究に取り組み、身近にある文化財の価値を磨き上げ、その価値を学ぶ機会を設けることにより、郷土に誇りを持てる人材を育成するまちづくりを目指します。

町民と行政が協働で進める取組	行政の取組
❶ 主体的な文化活動の推進	❶ 文化・芸術活動の促進
❷ 各種文化講座への積極的な参加	❷ 芸術文化活動を支える施設の維持管理
❸ 歴史資源の伝承	❸ 文化財の保存と継承・活用
	❹ 埋蔵文化財の保存と活用

文化財保存活用地域計画の位置づけ



今金町文化財保存活用地域計画で実現したいこと

資料４

保存

①文化財の指定・登録の推進
②砂金採掘跡の保存と整備
（喫緊の課題）
③文化財保護を担う住民団体の体制構築・人材育成

活用

①周遊コースの整備
②ピリカカイギュウ化石特設展示場の整備
③マンガン鉱山の再現展示
④郷土史教材の制作



調査

①カニカン岳金山跡
②マンガン鉱山
③カイギュウ化石、岩石鉱物
④町内重要遺跡
（チャシ跡、洞窟遺跡等）
⑤史跡ピリカ遺跡
（追加指定を想定）
⑥地域に残る植物、動物
⑦建造物の把握調査
⑧郷土芸能・祭礼調査
⑨町民悉皆調査

※北海道文化財保存活用大綱を勘案

文化財保存活用地域計画の計画期間

資料５

<table>
<tr><th>年 度（令和）</th><th>3</th><th>4</th><th>5</th><th>6</th><th>7</th><th>8</th><th>9</th><th>10</th><th>11</th><th>12</th><th>13</th></tr>
<tr><td rowspan="2">今金町総合計画</td><td colspan="10">第6次（10ヵ年）</td><td rowspan="2">第7次</td></tr>
<tr><td colspan="6">前期基本計画(5ヵ年)</td><td colspan="4">後期基本計画(5ヵ年)</td></tr>
<tr><td>今金町文化財
保存活用地域計画</td><td rowspan="2">策定作業</td><td colspan="9">第1次（9ヵ年）
令和4年～12年度</td><td>第2次</td></tr>
<tr><td>取組内容</td><td>文化庁審査</td><td colspan="9">計画記載の事業を計画的に実施する。
適宜、計画内容の見直し、評価を行う。</td><td></td></tr>
</table>

計画期間は、現行の第6次今金町総合計画の計画期間と調和を図り、9年間とする。
町総合計画は中間の5年で区切り、前期・後期それぞれで評価と見直しを図ることとしている。
これに準じ、当地域計画についても齟齬が生じないよう、事業の進捗状況や成果の点検・検証を行う。
また、社会経済情勢や文化財をとりまく環境等に大きな変化が生じた場合は、計画期間の途中であっても適宜計画の見直しを行う。

策定スケジュール

令和3年		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
委員会			第1回 13日		第2回			第3回		第4回		第5回	
主な内容		委員委嘱 選出依頼	概要説明 工程確認		現地確認	適宜、文書等で調査の状況報告		調査報告 内容審議	原案送付	原案審議 町民説明会	修正	原案確認	最終確認 答申
文化庁調査官			○					来町				○	
道庁担当者			○					来町				○	
把握調査	産業遺産		6～7日		○	○		○		講演			
	地質				○		○	○					
	建築		下旬	○	○		○	○					
	自然資源			○	○		○	○					
	重要遺跡	23～24日			○		○	○		講演			
	観光活用				○	○		○					
	町民対象悉皆調査		第1週 町内回覧	末日 募集締切	○	○	○	○		パブリック コメント			

把握調査

項目	依頼者	内容
産業遺産	山田大隆氏	マンガン鉱山等
地質・化石	能條歩氏	地層、岩石・鉱物、化石
建築	小林孝二氏	歴史的建造物
自然資源	檜山振興局森林室	巨木等
重要遺跡	宮塚義人氏	チャシ跡、金山跡の所在把握
観光活用	千葉里美氏	文化資源の観光活用（ピリカプロジェクト）
町民対象悉皆調査	全町民	全戸配布アンケート 石と化石のお宝鑑定会



今金の文化財調査 始動

町教委 保存活用計画作成へ

【今金】町教委は本年度、町内に眠っている文化財の調査に本格的に乗りだした。考古学や自然、産業遺産など、各分野で専門家に実際に見てもらい、それぞれがどれほどの価値があるのかを分析。1年かけて文化財保存活用地域計画を作成する。（塩野洋）

国は各地に残る文化財の保護などを目的に、各自治体に保存や活用に向けた計画作りを呼びかけている。文化庁には「地域文化財総合活用推進事業」の助成制度があり、本年度は今金町と根室管内中標津町を含む全国135自治体の申請が認められた。今金町の事業費は約230万円。大学教授などの有識者や町内の各種団体などで策定委員会を発足させた。

4月24日には、考古学の分野で、宮塚文化財研究所（札幌）の宮塚義人代表が1948年に米軍が撮影した航空写真を基に、町内中里地区を歩き調査。ささやぶの中に昭和時代の道路跡とアイヌ民族のチャシ（とりで）跡とみられる場所を見つけた。

宮塚代表は「今金町は昔から川や林道があり、アイヌ民族の交通の要所だった可能性がある。発掘調査すれば、アイヌ民族の生活の跡がたくさん見つかりそうだ」と推測した。町教委の宮本雅通学芸員は「町内でアイヌ民族の遺跡が見つかったことはなく、本格的に調べる必要がある」と話した。

専門家による助言に加え、町民アンケートなども行い、計画を作成する。これを基に、2022年度から30年度までの9カ年で計画を実行に移す。

宮本学芸員は「これまで調査しきれていないだけに、町民が保管している物も含め、眠っている文化財が多くあるはず。専門家に見てもらうことで新たな価値の発見につなげたい」と話している。



今金町中里地区で調査を行う宮塚義人代表（左）と宮本雅通学芸員

北海道新聞 朝刊
（渡島檜山版）
2021年5月12日